

## 2013（平成 25）年度エリザベト音楽大学大学院の

### 博士学位論文、内容の要旨および審査結果の要旨について

学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条およびエリザベト音楽大学学位規程第 12 条により、次の者の博士論文内容の要旨及び審査結果の要旨を公表する。

氏名	鹿取裕美子
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	甲第 14 号
学位授与年月日	平成 26 年 2 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	ロシアにおける 1917 年までのピアノ二重奏作品研究 ——全 42 作品の総合的様式分析を中心に——

#### 学位論文等審査委員

（総合審査）委員長	教授	柴田美穂
	教授	片桐 功
	准教授	菊池幸夫
（演奏審査）委員長	教授	柴田美穂
	教授	片桐 功
	准教授	菊池幸夫
（論文審査）委員長	非常勤講師	瀧本恵康（広島大学教授）
	教授	片桐 功
	教授	柴田美穂
	准教授	菊池幸夫

### 論文内容の要旨

ピアノ二重奏とは、1 台のピアノを 2 人で演奏する連弾と、2 台のピアノを 2 人の奏者がそれぞれ演奏する両方の形態を指す。その淵源は、1500 年代イギリスのヴァージナル音楽に見られ、後にチェンバロやピアノ音楽が受け継いでドイツとフランスを中心に発展し、古典派を経てロマン派以降サロン音楽の流行の中で人気を呼んだ。一方、ロシアは西欧に比べるとピアノ二重奏の歴史も浅く、作品数も少なく、ある一部の作品を除いてピアノ二重奏奏者のレパートリーとして頻繁に取り上げられるまでには至っていない。また、これまでの先行研究はいずれもドイツとフランスの作品を中心としたものであり、ロシア作品は長い間これらの作品の狭間で見落とされてきた。

ロシアに関しては、限定した研究は見当たらない上、正確な作品リストや連弾と 2 台ピアノ

両方に関する歴史研究や奏法研究も少なく、楽曲分析を施している例もなかったため、本研究ではロシアにおける 1829 年から 1917 年までのピアノ二重奏作品に見られる様式的変遷について研究を行うことを目的とした。

第 1 章では、ルネサンスから現代に至るまでのピアノ二重奏作品が西欧で広まっていく経緯を主要作品と共に辿った。

第 2 章では、ロシアにおいても同様にピアノ二重奏作品の歴史を辿った。その際、研究対象時期をロシアで初めてピアノ二重奏作品が書かれた 1829 年からロシア革命が起こった 1917 年までに限定し、4 つの時代に区分した。ロシアは西欧と同じヨーロッパ大陸に位置するものの、ドイツ・フランス圏と同じ時代区分では当てはまらないため、第 1 節では先行研究から検討し、どのような時代区分がなされるべきか考慮した上で、第 2 節から第 5 節では 4 つの時代について社会的背景や各皇帝の文化政策を交えながらその主要作品を挙げた。

第 3 章では、現段階で判明しているロシアにおけるピアノ二重奏作品のリストを作成した。ここで挙げる作品は 1829 年から 1917 年までに作曲され、現在出版されているものに限定した。とりわけ形態、作曲年、オリジナル作品又は編曲作品、また編曲作品の場合には原曲の編成を詳しく記した。続いて曲種を分類し、さらにオリジナル作品か編曲作品かに分けて特徴を述べ、作品数とその傾向を探った。

第 4 章では、ヤン・ラルーと大宮眞琴による総合的様式分析に基づいて分析を施した。これまで、ピアノ二重奏作品を分析した先行研究は無かったため、本研究では総合的様式分析を用い、全 42 作品の様式的特徴をまとめた。ただし、この分析方法をそのまま適応することは難しかったため、ピアノ二重奏作品の分析に即した言葉遣いに修正して独自の観察項目を付け加えた。

ラルーは音楽的構図をラージ・ディメンション、ミドル・ディメンション、スモール・ディメンションの 3 段階の観察レベルに分け、サウンド、ハーモニー、メロディー、リズムの 4 つの音楽的視点と、4 つの音楽的視点を統合する役割を持つグロウスを設定している。これらを踏まえた上でラルーの分析手順に従い、まず作品の様式的特徴についてチェック・シートに記入した。次に時間軸に沿って 4 つの音楽的視点の様相と 4 手の配置を記入したタイム・ラインを作成し、最後に 4 つの音楽的視点を統合し音楽的構図と重ね合わせる生成過程をグロウス・プロセスシートにまとめた。そして、これらに加えて個々の作品の作曲経緯や成立背景、奏法上の特徴も述べた。

第 5 章では、第 4 章で行った分析に基づいて、音楽的構図と音楽的視点とグロウス・プロセスが 4 つの時代を経てどのように変遷していったのかを観察した。

このような考察を行った結果、1829 年から 1917 年の間に成熟したロシア作品には西欧の作品に見られない特徴が 4 点見つかった。

1. 第 1 時代にロシアで初めて書かれたピアノ二重奏作品は、グリーンカによる西欧風の連弾作品であり、第 1 時代はオリジナル連弾作品のみが作曲された。
2. 第 2 時代にはオリジナル連弾作品が多く書かれたが、これらは演奏会用として書かれておらず、難易度が高くなく、技術的に易しいものばかりである。とりわけそこにはロシア民謡が取り入れられていることが多い。また、この第 2 時代から 2 台ピアノ作品も書かれるようになっていった。

3. 第3時代に入ると2台ピアノ作品が多くなり、民族的な主題を扱う傾向が強まった。これらの作品は演奏会用の作品としてより高い技術や音楽性が求められた。また数曲の性格的小品を集めた近代組曲として書かれた作品が多く、特に第3時代のアレーンスキイとラフマニノフが2台ピアノのための組曲を数多く残し、これらが20世紀初頭のフランスの作曲家に対して先駆的な作品となった。また、この第3時代はグロウス・プロセスが最も複雑になり、4手の配置についても様々な配置方法が考案され、配置の変化により1台ないしは2台のピアノでオーケストラのような多彩な音色を表現することができるようになった。
4. 第4時代になると荒廃した社会背景の影響もあり、連弾も2台ピアノも作品数が減少し、ストラヴィーンスキ以外の作品は民族的な素材を生かしたものは見られなくなっていた。

以上のように、収集したピアノ二重奏作品を歴史の観点、作品数の推移、曲種の分類、総合的様式分析を通して多角的に観察したことで、当時のロシアピアノ二重奏作品の諸相が明確になった。ロシアピアノ二重奏作品は、短期間のうちに西欧で流行していたピアノ二重奏音楽を取り入れ、ロシア固有の民謡を作品に生かして独自の発展に成功したという結論が得られた。

## 審査結果の要旨

### 1. 演奏審査

これまでピアノ二重奏の研究といえばヨーロッパのみに限られ、ロシアにおけるピアノ二重奏については、今まであまり研究対象とされてこなかった。その分野を開拓したという意義は大きなものがある。演奏発表では、大きく4つの時代に分けて捉えた研究分析に基づき、研究対象全体を見渡せるような興味深いプログラム構成となっており、共演の岡本佳子氏との息もよく合い、非常に質の高い演奏であった。しかし、全体の変遷を見渡すためとはいえ、取り上げた曲はあまりに小さな作品が多く、またラフマニノフの組曲以外は、曲としての格差があり物足りない面があったことは否めない。またラフマニノフの組曲では、スタッカートなど奏者二人の奏法が微妙に食い違う面があり、また、旋律の浮かび上がらせ方、オブリガートの扱い方などに留意しながら、もう少し踏み込んだ演奏が出来たのではないか。力は感じられるだけに残念であった。

以上、今後の研究の余地はあるものの鹿取裕美子の演奏能力においては十分に博士号授与に値するものとして審査員全員一致の合意を得た。

### 2. 論文審査

本研究はロシアにおける1917年までのピアノ二重奏作品を論じたものである。連弾と2台ピアノを含むピアノ二重奏作品の研究はこれまで少なく、それもドイツとフランスを中心としたものであった。ロシアに限定した研究はこれまで見当たらず、ロシアにはピアノ二重奏作品が全部でどのくらいあるかの正確なリストも存在していない状況があった。本研究はまだ手が

つけられていなかった分野を初めて本格的に取り上げたという点で、意義がある。鹿取さんの研究によってロシアでは1829年のグリーンカの作品からロシア帝政が崩壊する1917年までにピアノ二重奏作品はオリジナル作品が42作品、編曲作品が49作品あったことが明らかになった。次いで彼女はオリジナル作品全42作品に焦点を絞って分析を行っている。分析方法はヤン・ラルーと大宮眞琴による総合的様式分析に従っている。分析の後は、その総合的様式分析のまとめとして、音楽的構図、音楽的視点、グロウス・プロセスが取り上げられている。こうした研究の結果、結論としては、ロシアにおいてピアノ二重奏作品は1855年までの第1時代、1855～1881年の第2時代、1881～1905年の第3時代、1905～1917年の第4時代、この4つの時代に様式がどのように変遷していったかという変遷過程を述べることに力点が置かれていたが、少しもの足りないとの印象も残った。本文ではもっといろいろなことを述べており、演奏上の留意点とか、教育的効果とかについてもまとめてほしかったし、ドイツやフランスなど西欧諸国と比べた時のロシアにおける独自の特徴が何であったのかなど打ち出せるのもっとよかったのではないかとの意見もあった。しかし本論文は何よりも頁数が多く、オリジナル全42作品を一つひとつ分析したチェックシート、タイムライン、グロウスプロセスシートについての別冊付録資料集は大変貴重なもので、今後この分野を研究しようとするものに役立つことは疑いなく、博士後期課程における3回のリサイタルでもロシアにおけるピアノ二重奏作品を取り上げて考察を深めてきたことから、4年間の成果としてはもう十分であろうとの判断に至った。

### 3. 総合審査

以上の演奏審査と論文審査を総合判断し、この研究は今後この分野を研究しようとするものに十分寄与するであろうことから、全員一致で「博士（音楽） Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに値するものと判定された。